

子どもの心 IV 「もりの じどうはんばいき (思いやり)」

お花畑の中の一本道を通り抜けると、こんもりとした森の入口が見えてきました。そこには、木々は生い茂り日陰にはフルーツの実もあります。小鳥はさえずり、お花も咲きそろい、樹液の甘い香りも広がっています。森の中からは、いろいろな動物たちの呼び合う声が聞こえてきます。

風が運んでくる日の光、木の上に広がる青い空。でも、うさぎのぴよん子ちゃんは、いつも独り(ひとり)ぼっちです。けれど、ここに来るとお母さんに会えるのです。なぜかというと、森の入口では、きつねのお母さんが待っているからです。向こうからぴよん子ちゃんがやってくるのを見つけると、「よし、きょうもぴよん子ちゃんと一緒に遊んであげよう。」と、木の陰に隠れて待っているのです。そしてその場所で、呪文(じゅもん)を三回唱えます。『きつねからうさぎさんになあれ！きつねからうさぎさんになあれ！きつねからうさぎさんになあれ！』と言いながら、3回体を回すと、白い長い耳をした、うさぎのお母さんになりました。でも、長いしっぽだけは隠しきれずに出たままです。

「はい、お母さんよ。一緒に遊びましょう。」と、ぴよん子ちゃんの前に跳んで出ました。周りには、木や土のいい香りがしています。ほおに風がさわって、すがすがしい空気をいっぱい吸います。そして、久しぶりに、『♪大きなくりの木の下で♪』を歌いながら、一緒に踊りました。かくれんぼもしました。ぴよん子ちゃんが捜しに行くと、木の陰から長いしっぽが見えています。「見つけた！」今度は、お母さんが捜しに行くと、花の陰に隠れたのに、ぴよん子ちゃんの長い白い耳が、お花の上に見えています。「見つけた！」「見つかった。」そう笑いながら、楽しく過ごしました。「また遊ぼうね。」そう言いながら、仲良くさようならをしました。

帰り道を少し行くと、うさぎのお母さんは、元に戻ろうと木の陰に隠れようとしていました。その時です。いたずらぎつねのゴン太が真向かいからやってくるではありませんか。「おや、うさぎのお母さんがいるぞ。一つおどかしてやろうぜ。」そう言った途端に、ゴン太は、木の陰から「わっ。」と飛び出し、うさぎのお母さんに勢いよく噛みつきました。

「きゃあ、待って、待ってよ。わたしは、わたしは、あなたの……。」
そう言って離れようとしたが、足に噛みつかれてどうにも離れません。「痛い。足がちぎれるよーう。」お母さんは、やっこのことでゴン太の牙を振り払い、足を引きずりながらも、なんとか逃げ切りました。

早くじゅもんを唱えて、きつねのお母さんに戻らなければと思うけれども、足に噛まれて痛いけがを負ったので、なんと3回言えばよかった言葉が思い出せません。「えーと、『うさぎさんからうさぎさんになあれ』、うーん、おかしいな。」じゅもんを3回唱えて体を回そうとしますが、痛い足がどうしても回りません。何度やっても、うさぎのお母さんのままで、とうとうきつねのお母さんに戻れませんでした。

次の日、ゴン太は、いつもより早く森の入口に着きました。すると、向こうからぴよん子ちゃんもやってきました。そこで、ゴン太は考えました。ぼくは、いつもひとりぼっちで、さみしいです。ぴよん子ちゃんとならば、一緒に楽しく遊びたいなあ。そうだ、いつものいたずらはやめて、一緒に楽しく遊びたいなあ。

「ぴよん子ちゃん、もうぼくは、いじわるをしないよ。だから、一緒に遊ぼうよ。」

「はあーい、約束よ、ゴン太くん。一緒に遊ぼうよ。」そう言って、『♪大きなくりの木の下で♪』を歌いながら、踊りました。かくれんぼもしました。近くの木の下では、お母さんうさぎがいました。傷が治っていないので、きつねのお母さんにまだ戻れません。仲良く遊んで楽しそうな二人を見守ると、そっと離れていきました。

二人は、楽しく遊んで仲良しになりました。そこで、ゴン太は、「ぴよん子ちゃん、ぼく、楽しいところを知っているよ。一緒に行こうよ。」そう言うと、ぴよん子ちゃんも一緒についていくことにしました。耳を澄ませると、鳥のさえずりや落ち葉を踏む音も聴こえてきます。

二人で森の奥へ歩いていくと、道の角に、大きな箱が立っているのを見つけました。看板のようなものに、何か書いてあるようです。「なにになに、『もりのじどうはんばいき』、だって。『木の葉を出し入れ口から入れて、お願いごとを言うと、出てきます』だって。」「ふーん、よし、ぼくやってみるね。」ゴン太くんは、そう言うと、大きな木の葉を選んできて、入り口に差し入れました。「おにぎりをちょうだい。2個ほしいよ。」そう言って、二人で出口をじっと見つめて、待つことにしました。

すると、どうでしょう。「はい。美味しいおにぎりよ。2個どうぞ。」と、手のひらに載ったおにぎりが、すーっと出てきました。ゴン太は、「よし、このおにぎり2個、もらったぜ。」「うふふ。そして、あなたの腕も。」そう言って、出てきた白い腕に噛みつこうとしました。でも、次の瞬間、はっとしました。なんと、白い腕の途中に、歯型の大きな傷跡があるのです。白い腕のその傷跡は、ゴン太に確かに見覚えがあります。「もしかして、僕が噛んだ、あのときの傷かも。」「それなのに、この僕におにぎりを出してくれるなんて。」「今までのいたずらは、ほんとうにごめんなさい。」そして、「どうもありがとう。」そう言って、手から拝むようにしておにぎりをもらい、握手もしました。

「おにぎりを2つ頂いたから、一緒に食べようよ。」「どうもありがとう。ゴン太くん、やっぱり優しいのね。」そう言って、二人で1つずつ、美味しくいただきました。『じどうはんばいき』の後ろでは、『うさぎさんから、きつねになあれ！うさぎさんから、きつねになあれ！うさぎさんから、きつねになあれ！』と唱える声が聞こえ、どうやら、きつねのお母さんに戻っていつているようでした。『じどうはんばいき』は、なおも、続けてお話をしてくれています。「あら、そうそう。ゴン太くんは、ほんとうはさみしいのね。友だちが欲しいのよね。」「あした、森の広場の動物さんたちにも今のこのお話をして、これからは、みんなと仲良く遊ぼうね。」すると、ゴン太くんとぴよん子ちゃんも「そうしよう、約束しよう。」と、元気な声で答えました。木々の根元には、かわいい黄色いボンボンのミツマタの花が咲き誇っています。あしたから、森の広場は、仲良し動物さんで、とてものにぎわうことでしょう。

(榎白真 屋形)